



地域国際化協会連絡協議会会長
(公財)長崎県国際交流協会理事長
高田 勇

忘れえぬ国際交流、 忘れまじ東日本大震災

私は、長崎県知事在職中の平成2年11月の協会設立当初から理事長を拝名し、その間平成11年6月から地域国際化協会連絡協議会会長という重責を勤めさせていただいております。国際協力、国際交流から多文化共生社会を見据えた協会のあり方の難しさを感じる今日この頃でもあります。

振り返れば、昭和57年2月知事に就任以来、中国福建省との友好県省締結調印式において、当時の福建省長と友好の花を咲き誇らせようと誓い合ったのは忘れえぬ思い出でもあります。今年は30周年の記念すべき年であります。

昭和60年5月には、当時の胡耀邦総書記のご尽力もあり、長崎市に中国総領事館が開設され、中国と長崎の新たな友好の出発点となりました。かつて訪中してお会いした折、『中日両国の青年は、歴史の教訓の中からお互いの知恵をくみ取り、自分自身を愛国心の情熱と国際主義の精神に富んだ気高い現代人に鍛えられるよう望む』と述べられた言葉は忘れられません。平成3年4月、ソ連のゴルバチョフ大統領が来県し、数百人のロシア人が手厚く埋葬されている墓地を訪れたこと。今年で在ブラジル長崎県人会創立50年を迎えるブラジルの訪問、日韓海峡沿岸8県市道の首長が一堂に会する知事交流会議は今年で21回目を迎え、第1回が長崎で開催されたこと。さらに、最後の李朝通信使訪問から今年で201年となる韓国との深い交流など、国際交流の思い出は尽きることはありません。その一方、民間国際交流団体^{そくぶん}を支援するための事業は、最近低調であるとか、中国等からのホームステイを受け入れる家庭の減少などを仄聞しますが、住民に身近な国際交流の課題解決に取り組む必要があると感じております。また、大震災などの影響で、本県の外国人留学生も減少しており、留学生支援のあり方についても、産学官の関係者で検討しているところでもあります。

さて、今回の震災で失ったものは計り知れないほど大きく、生々しい記憶は忘れ去られることはないと思いますが、かつて私が復興対策に奔走した雲仙普賢岳噴火災害から20年経ち、市民は再び郷土に安堵の生活を取り戻しております。しかも、多くの方々が元の被災地に嵩上げ^{かさあげ}した郷土に再び戻り住んでおられますが、これは住み慣れたふるさとへの愛着もさることながら、地域に施された強固な各種の復興工事に深く信を寄せているからにはほかならないからと思うのです。地域国際化協会連絡協議会においては、外国人住民の災害時の支援に向けて、各地域ブロック単位や地域ブロック相互間の災害時の広域連携支援体制について、早急に検討^{よみか}されるとともに、東日本大震災の本格的復興工事の進捗と早期の完成を願うものです。被災地の皆さんが、甦^{よみが}えった安全・安心な郷土で被災前と同様な安堵の生活が早く送れるようになることを願ってやみません。